
思い出

ゴンギツネ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

思い出

【Nコード】

N3891BA

【作者名】

ゴンギツネ

【あらすじ】

手紙が届きました。

愛する人から。

赤い郵便受け。ポストと見間違えるような立派な郵便受けに高橋たかは美和しみわは、新聞を求めて手をつ突っ込んだ。傍から見たら、泥棒にも見えかねない。しかし、早朝なので誰にも不審な目を向けられることはなかった。

「……？ なにこれ？」

新聞の下に、四角い 葉書？ 住所が書かれていなかったため、直接入れたのだろう。しかし、誰だろうか。近くの人だろうと思う。まさか、切手代がもつたいないからここに来たわけではないだろう。本末転倒だ。まあ、散歩がてら来たのかもしれないが。

目に入ってきたのは、懐かしい筆跡だった。美和の初恋の人 三河敏和みかわとしかずだった。

三河敏和をいじめていたのを助けてから、告白された。彼が引越して消滅したが、まだ彼のことしか考えられなかった。

高鳴る鼓動。必死に押さえつける。

“ 高橋美和さんへ
あの時のことを覚えていますか？ 貴方が、僕を助けてくれた時のことです。”

「おい、三河！ これ、取り返したいならかかってこいよ！」
変顔をして、高野修たかのしゅうが言う。

「返してっ！」

泣きべそをかきながら、敏和が言った。

「自力でかかって来な！」

そう言うと、敏和の筆箱を上に掲げながら、廊下に出ていった。

そこに美和が立ちふさがった。

「それ、三河くんのですよ？ 返してあげたら？」

「嫌だねえ！ おい、三河あ！ 女に助けられているぞ」

「なによ。女だからって関係無いでしょう？」

そう言つと、高野は舌打ちをしながら、

「三河が、女に助けられてるぞあ！」

と言つて逃げていった。

「あんたこそ女に論破されているじゃない！」

女子から拍手が出る。同時に、敏和を見た。小さくだが、『ありがとう』と口が開いていた

あの後、僕は貴方に告白しましたね。

手紙。茶封筒に入っているそれは、地味な茶封筒にあわず、四葉のクローバーの絵と、それを持っているパンダが描かれている。

“ 放課後、体育館裏に来てください。お話があります。三河敏和”

顔が赤くなった。告白されるのではないか。いや、早とちりかも
しれない。どうしよう

結局、授業をつわの空で聞くことになってしまった。

そして、放課後。

「高橋美和さん、僕と付き合ってください」

「う、うん。いいよ……」

そうして、付き合うことになったのだった。

だけど、別れることになってしまった

彼の家の前にトラックが止まっていた

「なんで？ どうして？」

「美和には、悲しい思いをさせたくなかったから……」

「思い上がらないで！ 言ってくればよかったじゃない……」
涙を堪えた。そして、別れも言わず、振り切って帰った。

僕は、そのことを後悔しているのです。また、貴方に会いたい。
しかし、僕にはそんな資格は無いと思います。貴方を止められな
ったのですから。

僕は、今日、夜に自殺します。貴方に会いたい。死ぬ前に、
もう一度 ”

そこには、場所が示された紙があった。

「敏和……！」

眠気は既になかった。

急いで飛び出す。

しかし、と思いとどまる。夜と書いてある。夜 何時なのだろ
うか。

結局、出たのは三時だった。

暗闇に、大きな波の音が聞こえた。普通なら神秘的なのだが、今

はとてつもなく不気味に感じる。

かつん。靴が地につく音。

「美和……？」

「敏和……？」

名前を呼ぶ。ほぼ同時のタイミングだった。

「な、んで？」

「人生に嫌気がさしてね。うるさい上司、生意気な部下、しつこい客……。この社会は弱肉強食だ。弱い者 僕みたいなのは食われて死ぬのさ。それに、早めに終止符をうとうと思ってるね」

「やめて」

ざばん、と。音がなった。直ぐに水飛沫が頬にかかる。

「敏和 ? な、んで……」

涙が出た。死んでは嫌……。

「一一九番……」

敏和は死んでしまった。彼の最期が目に見えた。手紙の最後を思い出す。

“ P・S 貴方のことが、好きです。これまでも、これからも。”

ずるいと思う。私は、一生あなたを愛しています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3891ba/>

思い出

2012年1月10日01時50分発行